

[052] 史淵表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/2335167>

出版情報 : 史淵. 52, 1952-05-01. Faculty of Literature, Kyushu University
バージョン :
権利関係 :

森先生御轉任

國史學第一講座擔當文學博士森克己教授は御家庭上の都合にて今般横濱市立大學へ轉任されることになり、三月九日離福された。

先生は昭和廿二年春本學に御着任以來九州史學界の發展に數々の御功績を残されたのは勿論、九州地區庶民資料の探訪調査に少からぬ寄與を致されたるを思い、またその御懇切なる御教導を仰ぐことにより本學史學科が清新の氣もて隆昌の一途を辿りつつあるとき、此度の御轉任は實に惜しみても餘りあることである。

因みに先生只今の御住所は東京都目黒區上目黒五ノ二五六八である。先生の御健康と御多幸を衷心より祈り兼ねてこの上とも吾々を御指導あらんことを切望する次第である。

二十六年年度卒業論文と新研究生

- 日蓮の宗教形成に關する史的考察 川添 昭 二
- 五代禁軍の發展について 菊池 英 夫
- 米西戰爭に關する一考察 奈賀 博 史

—モンロー主義から帝國主義への移行—

人民黨運動 (Populistmovement) にして 宮野 啓 二

十六世紀イングランドの農民抗爭 奎 尾 昭 忠
なお、四月一日附をもつて菊池英夫氏は東洋史研究室の研究奨學生に任ぜられた。

二十七年年度進學及び新(編入)學生

四月十四日(月)午前十時より文學部第五番教室に於いて進學式が行われ、次の諸君を本學科に迎えた。

國史學科

瀨野精一郎、長洋一、藤井賢三、藤本桂史、前山博(以上進學)

山本重信(編入學)、上野哲(舊制英文學より轉科)

東洋史學科

吉田早苗(進學)、高久舜一郎、田籠楠雄(編入學)

西洋史學科

西島有厚、馬場典明(進學)、戸田學

國史學科の動向

新刊

竹内理三教授は今回文部省學術局の研究出版助成金の交附を得て、東京堂より「平安遺文」第三卷を刊行された。さきに本書一、二卷を出され學界に益されるところ極めて大なるものがあつたのであるが、こゝに第三卷の刊行を見るに及び、この時代の研究は更に長足の發展が期待せられるであらう。

第二回國史學研究會發表要旨

筑前六宿の人馬仕組について

近藤典二

九州に於ける最重要陸路たる長崎街道は筑前領内に六つの宿驛をもつていた。即ち黒崎、木屋瀬、飯塚、内野、山家、原田の六宿であるが、この六宿の交通量漸増による助郷村の疲弊が問題となつて来るのは藩政後半期に入る元文年間以降であつた。思ふに宿村困窮の原因は第一に不規則、煩繁なる農民及び作馬の徴達と勞役であり、第二にその勞役に對する報酬即ち人馬賃錢の不當なる低廉性にある。従つて之が對策には第一に宿驛常備人馬の設置と第二に人馬賃錢の正當なる増額とが考へられるが、これらが共に藩政府の手によつてはなく、民間の手、即ち大庄屋の請負事業としてなされて來るところに頗る注目すべきものがある。即ち前者は延享年間鞍手郡の大庄屋武藏に始まり明和元年の同郡大庄屋勘吉の六宿人馬仕組によつて完成し、後者は同じく勘吉の努力によつて藩政府をして對幕交渉に乗出させ、賃錢増額を許可せしめたのである。

第三回國史學研究會(昭和廿七年四月二日)

對馬に於ける奴婢制の成立

安河内 博

一、對馬奴婢制の成立を論ずるには、先ず「奴婢被取下并返上」(對馬藩奴婢關係史料)を検討する要がある。此の記録によると

寛永—寛文頃に家臣に對し下人が賜與されているのであるが、これらの下人は次の二類に分つことが出来る。

(1) 中世以來下人賜與の制の傳統の下に、藩主より罪科とは關係なく賜與されたもの

(2) 科人籠舎之者(牢人)等を刑罰により下人として賜與されたもの

二、溯つて宗家「御舊判控」を中心とする下人關係史料についてみるに、文明以降寛文年間、島主の御判物を以て下人の賜與が行われていた事實を知り得る。

三、寛文以後に於ては、家臣(府士、田舎給人)等に對し下人を遣す場合に、諸種の事情よりして科人・籠舎之者・曳科者(縁坐者)等をあてることが支配的となつていた。

對馬が陸地と隔絶せる離島という條件下、食糧不足の地に多數の科人を籠舎に入れ置くよりも、勞役を課し生産に關與せしむるを有利とした關係から、奴婢制は元祿以降確立するに至り爾後幕末迄長年間に亘つて存続し、徳川時代には他に比類なき程整備された刑制となつていつた。

四、かゝる奴婢制の源流を辿るならば、應永以降對馬と朝鮮との密接なる關係より考察して、先ず李氏朝鮮に見らるゝ奴婢賜給の制度並に身分制としての奴刑の影響によるものであらうと考えられる。

卒業生送別會

二月十日正午より九大構外三長閣に於いて三月卒業の川添昭二

君、および内地留學の先輩大分大學安河内博助教の送別會を行つた。森・竹内兩先生を始め全員出席して兩氏の螢雪の功成れるを祝福し、今後の健闘を衷心より祈つて三時散會した。

森 先生 送別會

三月二日正午より岩田屋七階食堂に於いて森先生の送別會を開催した。竹内・西尾・檜垣各先生を始め卒業生も多數参加し極めて盛會であつた。

席上森先生は九大在任五年間の思ひ出を感慨深く語られ、惜別の念一入深きものあり、宴終るもなお名残はつきず早春の街を一同大濠公園迄散策し記念寫眞を撮影してのち四時すぎ散會した。

東洋史學科の動向

○新 刊

「東洋史學」第四輯（昭和廿七年三月）九州大學文學部東洋史研究室刊

執筆者並に題目は次の通り

北宋時代に所謂「草」に就いて	(一)	日野 開三郎
熙・豐年間に於ける民戸養馬法即ち保馬・戸馬二法に關する私見	(二)	古 川 新 平
健 步 附捉生軍		日 野 開 三 郎

— 唐宋用語解の三 —

宋史食貨志譯註 (四)

研 究 室 員

西洋史學科の動向

卒業生送別會

二月三日午後五時より三畏閣に於いて、奈賀博史、高橋昇、李尾昭忠、宮野啓二の四君の卒業送別會を行つた。小林、今來、服部の諸先生を中心に終始和氣みなぎる中に、四君の多幸と奮闘を祈つて九時散會した。

進學生歡迎會

西洋史學科は馬場、西島、戸田の三君を新たに迎え、四月廿一日午後三時半より第四演習室にて歡迎會を行つた。氣鋭の二君を加えて一層の充實を期している。

田中信明君

本會學生委員、東洋史學科新制三年在學の田中信明君は、去る二月四日午後六時、醫學部放射線科で感電、不慮の死を遂げられた。將來を期待せられ、又學生委員として本會の爲め熱心に盡力せられて居た同君の死は惜しみても餘りがある。學部長（代理）、日野・江島その他多數教官、研究室代表・友人代表その他學生多數、告別式に參列して哀悼の意を表した。こゝに同君の冥福を祈る次第である。

昭和二十七年第一學期(四月—十月)

史學關係講讀題目

國史學	藤原政權の成立	竹内教授
古文書學	古文書學	同
古文書學演習	講讀 近世庶民史料研究	同
日本思想史(演習)	東洋史學	西尾講師
五代史	日野教授	同
特講	同	同
演習	同	同
唐書食貨志の研究	鈴木講師	同
明代女直史	江嶋講師	同
西洋史學	小林教授	同
史學理論史の研究	同	同
フランス舊制度史	同	同
演習(A) Max Weber: Roschev und Knies und die logischen Probleme der historischen Nationalökonomie	同	同
(B) Hammond: The Village Labourer	同	同

その他

地理學	三上講師
古代中世哲學史	長澤教授
西洋現代哲學史	田邊教授
實驗心理學史	秋重教授
日本美術史	谷口助教授
美術史の理論	谷口助教授
宋學史概説	楠本教授
中國古代思想史	山室助教授
印度哲學史概説	干潟教授
日本近世文學史	杉浦助教授
教育史概説	平塚教授
イギリス教育史	平塚教授
現代極東政治史	具島教授
第十八世紀政治思想史	今中教授
西洋經濟史	宮本教授

昭和二十六年三月十一日以降

交換受贈雜誌目錄

大分大學經濟論集 第三卷	大分大學
第一號	經濟研究所
日本學士院紀要 第八卷	日本學士院
第三號	第三號

日本學士院紀要 第九卷	日本學士院
第一號	第一號
朝鮮學報 第二輯	朝鮮學會
一橋論叢三月號(第二七卷)	東京商大會
第三號	一橋學會
橫濱市立大學紀要 No.1	橫濱市立大學
文化 第十六卷第一號	東北大學文學會
文化 第十六卷第二號	東北大學文學會
東洋文化 8	東大東洋文化研究所
產業勞働研究所報 第2號	九大產業勞働研究所
經濟情勢 一九五二、三 No.270	三菱經濟研究所
史學雜誌 第六一編第三號	史學會
立命館文學 三 第82號	立命館大學
東洋文化 1	東大東洋文化研究所
考古學雜誌 第三十八卷 第一號	日本考古學會